第８章　　考　　察

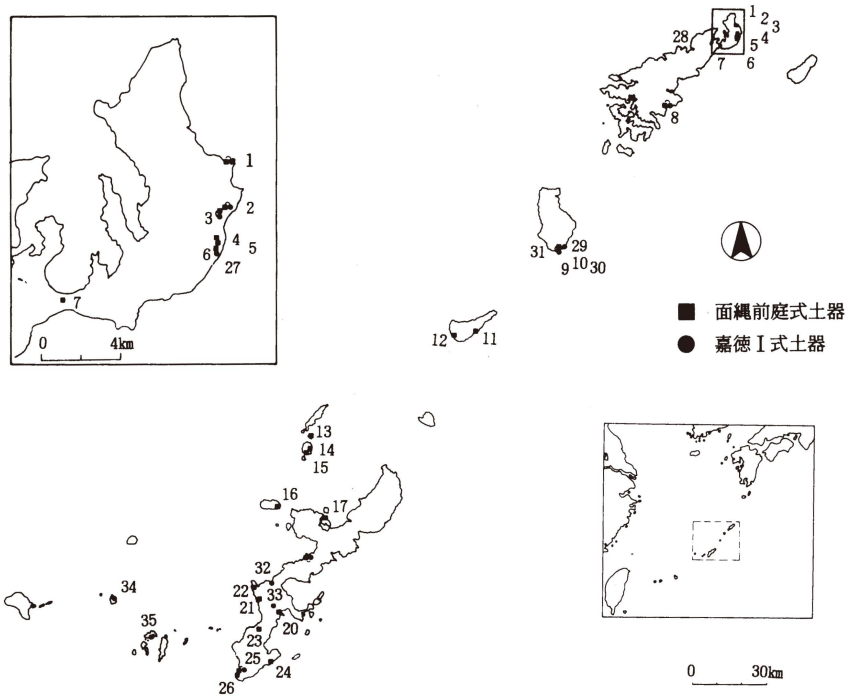
第１節　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器

面縄前庭式土器

面縄前庭式土器は，徳之島（伊仙町面縄）にある面縄第４貝塚の前庭部より発見された土器で，1956年８月13日より８月24日まで，国分直一，河口貞徳，原口正三，野口義麿等の九学会考古班によって調査が行われた。

当時は宇宿下層式土器として一括されていたが『器形に特徴があり，頸部がしまり，口縁部はやや外反し，胴部の張った尖底又は丸底の土器である。口縁部と肩部に細くひらたい凸部を附し，刻目をつけ，頸部の凸帯間と肩部の凸帯から胴部へかけて数条の沈線を鋸歯状に施文している。上下二条の凸帯間に四ケ所縦に凸帯を附したものが一般的である。器壁は比較的薄く，焼成度はやや良く，赫褐色の土器である。』[注1] というように，前庭部に単独に出土した一形式であるとされ，面縄前庭式と名称された。

編年上は，凸帯と凸帯の間の線刻の類似等により，面縄西洞式の影響を考えられ，縄文時代後期～晩期相当期に位置づけられている。1950年代の九学会の総合調査後，奄美諸島の先史学的調査は，鹿児島短期大学南日本文化研究所の総合調査（踏査等による）がある位でほとんど調査がなされなかったが，1970年，文化庁の委嘱により，重要遺跡の緊急指定資料の調整を目的として沖永良部島の住吉貝塚や宇宿貝塚の調査が行われ，また1970年代後半になり，各教育委員会，熊本大学，鹿児島大学，沖縄国際大学等の南島文化先史学的調査が活発になり成果をあげている。その結果，1982～1983年にかけて鹿児島大学と沖縄国際大学の合同調査が行われ



第51図　面縄前庭式土器と嘉徳Ⅰ式土器出土分布図

た神野貝塚において面縄前庭式土器は，嘉徳Ⅰ式土器の下層より出土し[注2]た。また，笠利町ケジ遺跡においては縄文時代後期前葉に位置づけされる松山式土器と共伴し[注3]た。これらのことより面縄前庭式は現在の編年より古くなる可能性がある。

面縄前庭式土器については，中山清美氏が笠利町郡土館館報[注4]でくわしく述べられているのでここでは，それ以後発見された遺跡等を加え，遺跡地名表と分布図をまとめてみた。

第10表　面縄前庭式土器出土地

番号	遺　跡　名	所　在　地	文献
1	あやまる第2貝塚	大島郡笠利町須野	本文
2	宇宿貝塚	〃　笠利町宇宿大籠	①
3	宇宿高又遺跡	〃　笠利町宇宿高又	②
4	万屋下山田遺跡	〃　笠利町万屋下山田	③
5	ケジ遺跡	〃　笠利町万屋ケジ	③
6	中永田C遺跡	〃　笠利町万屋中永田	③
7	ウフタ遺跡	〃　竜郷町赤尾木ウフタ	④
8	嘉徳遺跡	〃　瀬戸内町嘉徳	⑤
9	面縄第1貝塚	〃　伊仙町面縄	⑥
10	面縄第4貝塚	〃　伊仙町面縄	⑦
11	神野貝塚	〃　知名町神野	注2
12	大津勘長浜遺跡	〃　知名町大津勘	⑧
13	具志川島遺跡群	沖縄県島尻郡伊是名村具志川島	⑨
14	仲田貝塚	〃　〃　〃　仲田	⑩
15	伊是名貝塚	〃　〃　〃　伊是名	⑪
16	浜崎貝塚	〃　国頭郡伊江村東江前	⑫
17	渡喜仁浜原遺跡	〃　国頭郡今帰仁村西原	⑬
18	伊武部貝塚	〃　国頭郡恩納村伊武部	⑭
19	隅原遺跡	〃　具志川市昆布	⑮
20	室川貝塚	〃　沖縄市嘉間良	⑯
21	浜屋原遺跡	〃　中頭郡読谷村宇座	⑰
22	渡具知東原遺跡	〃　中頭郡読谷村渡具知	⑱
23	浦添貝塚	〃　浦添市仲間	⑲
24	百名第二貝塚	〃　島尻郡玉城村百名	⑳
25	名城前原遺跡	〃　糸満市名城前原	㉑
26	喜屋武遺跡	〃　糸満市喜屋武	㉒

＜文献＞

①河口貞徳，出口浩，本田道輝『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書　1979
②熊本大学考古学研究室『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告2　1978
③熊本大学考古学研究室『ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡』笠利町文化財報告No. 6　1983
④熊本大学考古学研究室『ウフタ遺跡』研究室活動報告12　1982
⑤河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　1974
⑥牛ノ浜修，堂込秀人『面縄第1，第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書1　1983
⑦九学会連合「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』　1959
⑧中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町立郷土館館報』創刊号　1981
⑨安里嗣淳，佐野一也『具志川島遺跡群，第一次発掘調査報告書』伊是名村文化財調査報告書第1集　1977
⑩沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
⑪沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
⑫安里嗣淳，当真嗣一『浜崎貝塚』伊江村文化財調査報告書第1集　1976
⑬大城逸朗，新田重清他『渡喜仁浜原貝塚』今帰仁村教育委員会　1977
⑭上原静他『伊武部貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第51集　1983
⑮高宮廣衛他「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』創刊号　1976
⑯高宮廣衛，比嘉賀盛「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」『沖国大考古』創刊号　1976
⑰高宮廣衛「浜屋原遺跡」『日本考古学年報29』　1976
⑱高宮廣衛，知念勇他『渡具知東原』読谷村文化財調査報告第3集　1977
⑲新田重清「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号　1970
⑳沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977
㉑岸本義彦，山田正他「糸満市名城前原遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』No. 6　1978
㉒沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布』　1977

嘉徳Ⅰ式土器

嘉徳Ⅰ式土器は，大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡で発見された土器で，1974年８月３日より16日まで瀬戸内町教育委員会が主体になり，河口貞徳氏，鹿児島大学考古学研究会で調査が行われた。『平底の深鉢形で，胴が細く，口縁部は外反する。波状口縁をなし四個の低い山形隆起部をもつ。口唇部は平坦で外傾し，篦による刺突文を連続して施文している。口縁部は肥厚して文様帯をなし，篦描きの平行沈線を横位に描き，その間に連続刺突文を施す』『押し引き手法を引き継いだものを嘉徳Ⅰ式Ａとし，沈線間の刻文が連続圧痕文となり，施文具の幅が広く文様が短い線を並べた状態になったものを嘉徳Ⅰ式Ｂとした[注5]』とあり，編年上は，面縄東洞式土器と嘉徳Ⅱ式土器の間にはいり，面縄東洞式土器が市来式土器と共伴することから縄文時代後期相当に位置づけられている。

第11表　嘉徳Ⅰ式土器出土地

番号	遺　跡　名	所　在　地	文献
1	あやまる第２貝塚	大島郡笠利町須野	本文
2	宇宿貝塚	〃　〃　宇宿大籠	①
3	宇宿高又遺跡	〃　〃　〃　高又	②
27	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	〃　〃　万屋長浜金久	③
28	天川遺跡	名瀬市朝仁天川	③
8	嘉徳遺跡	大島郡瀬戸内町嘉徳	④
29	喜念貝塚	〃　伊仙町喜念浜	⑤
10	面縄第２貝塚	〃　伊仙町面縄	⑥
30	面縄第４貝塚	〃　伊仙町面縄	⑦
31	犬田布貝塚	〃　伊仙町犬田布	③
18	伊武部貝塚	沖縄県国頭部恩納村伊武部	⑧
32	仲泊第４貝塚	〃　〃　〃　仲泊比屋根原	⑨
33	仲宗根貝塚	〃　沖縄市仲宗根	⑩
25	名城前原遺跡	〃　糸満市名城前原	⑪
34	渡名喜東貝塚	〃　島尻郡渡名喜村渡名喜	⑫
35	古座間味貝塚	〃　〃　座間味村古座間味	⑬

＜文献＞
①河口貞徳，出口浩，本田道輝『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書　1979
②熊本大学考古学研究会『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告　2　1978
③鹿児島県教育委員会報告書作成中
④河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　1974
⑤伊仙町歴史民俗資料館に表面採集品展示
⑥牛ノ浜修，堂込秀人『面縄第１，第２貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1983
⑦九学会連合「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』　1959
⑧上原静他『伊武部貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第51集　1983
⑨金武正紀，安里嗣淳他『仲泊遺跡，1975，1976年度発掘調査報告書』恩納村文化財報告書第１集　1977
⑩嵩元政秀，知念勇他『仲宗根貝塚，第一，二次発掘調査概報』沖縄県文化財調査報告書第33集　1980
⑪岸本義彦，山田正「糸満市名城前原遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』第６号　1978
⑫日本考古学年報33
⑬岸本義彦，島袋洋他『古座間味貝塚一範囲確認調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第43集　1982
参考文献
注１　国分直一，河口貞徳他「奄美大島の先史時代」『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻Ｐ405　1981
注２　鹿児島大学　上村俊雄助教授教示による。
注３　熊本大学考古学研究室「ケジ遺跡」『笠利町文化財報告 No.6』　1983
注４　中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町立郷土館館報』創刊号　1981
注５　河口貞徳，上村俊雄他「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第10号　Ｐ28～29　1974